

福島の  
児童文学者16

上野雅典

会津の自然・動物・人間を、優しくそして切なく描写した一人の詩人がいる。彼の名は上野雅典(うえの・まさのり)。会社を経営する傍ら、サトウハチローの主催する「木曜会」に籍を置き、多くの詩や童謡を残している。それでは、彼の生い立ちからご紹介するとうよう。

昭和十九年五月満州生まれ。二十年八月に帰国すると、中学までを福島県で過ごしている。三十五年三月山郷中学校(現在の耶麻郡高郷村立高郷中学校)を卒業。同年五月上京し、会社勤めをするも五十三年に退社、その後ベルト製造会社「ダンボ」を設立している。しかしながら、五十九年四月に自動車事故に遭遇、将来を期待されつつ夭折している。

〔木曜会との出会い〕

「木曜会」とは、サトウハチロー、藤田圭雄(ふじた たまお)、野上彰が中心になり、毎週木曜日に新人養成的に絞って行われた会である。

この「木曜会」の集まりがいつ発足

したか分かかっていないが、昭和二十一年四月に雑誌『赤とんぼ』が創刊されたことを機に、サトウ・藤田・野上が弥生町のサトウ邸に集まり、新しい童謡運動を語り合うようになった。そこには、菊田一夫や与田準一等も加わっていたという。

その後、毎週木曜日に定期的に行われるようになり、何時しか新人養成のための会となっていた。この卒業生は二百人にもなると、その中には宮中雲子の名も見える。

上野雅典は昭和四十一年六月に「木曜会」に入会している。仕事大事で詩の修行のつづかない男性が多い中で、上野は最も出席率がよく、着実に詩心を身につけていったという。

この会では、生徒の作品を便宜上謄写版刷りにしたのが、いつしか活字の雑誌に成長し、昭和三十二年四月に「木曜手帖」として創刊。上野も編集部メンバーになった。

〔上野の作品〕

上野の作品は、『木曜手帖』に六十五篇が掲載され、四十四年五月には、木曜会努力賞を受けている。その時サトウハチローは、「上野さんはたよりないよううでいて、何となく面白いうたをかいている。この人独特の田園風景が買われて今回の受賞となった」と評している。その作品とは、

水よ はよはよたんぼにたまれ

カヤツリ草に 水引き草

つんではあむのに あきてるぞ

水よ はよはよ たんぼにたまれ  
もうじきみんなが 泳ぎに行くぞ

オケラの穴に われた畔

さがしてつめたぞ もらないぞ

水よ タニシの 背中が見える  
川原でみんなが まってるぞ

オタマジャクシに アメンボー

泳いでみせたぞ はねてるぞ

水よ もすこし いそいでふえろ  
そろそろみんなが 帰って来るぞ

この詩は、後に滝本泰三作曲でNHKより放送され、レコードにもなっている。

この他に、「春になったぞ」(中田一次・作曲)と「しもやけあかぎれ ほんとにしゃくだ」(小川寛興・作曲)が、子どもたちに歌われた。

しもやけあかぎれ

ほんとにしゃくだ

しもやけあかぎれ 手足にふえる  
おもてにでるたび チクンといたい  
グーチョコキパーの ジャンケンポンも  
いつでもおこられて おこられた

しもやけあかぎれ 耳にもできた

北風つきさす ミトンでかばう

毛糸についた ミカンの汁が

キーンとおくまで しみこんだ

しもやけあかぎれ 指でもしゃくだ

こたつの中では とつてもかゆい

戸棚のおかし つまみに行く

クスリの匂いで 見つかった

上野の一周忌に、木曜会の仲間が『詩集 水よ はよはよたんぼにたまれ』

を出版した。掲載された作品は五十六篇、大部分は『木曜手帖』に掲載された作品だが、中には、サトウハチローが選者をしていた雑誌『サンケイ随筆』の詩の欄に入選した作品も、数篇含まれている。

上野と金子みすゞには、共通するものがあると言われている。年代や現代詩と童謡の違いはあるけれど、自然のやさしさと、失われていく田園の郷愁を、二人とも暖かく歌いあげている。その中でも上野の詩には、会津の田園風景が切なく描かれており、会津をこよなく愛していたのが感じられる。

○参考文献

- ・藤田圭雄・著『改題戦後日本童謡年表』(東京書籍・刊)
- ・雑誌『詩脈』(詩脈の会)
- ・雑誌『日本童謡』(日本童謡協会)